

(II) 「シェルドンによって奉仕理念が確立したあとの展開について」

——前回 8 月 24 日のロータリー情報 10 分間②の続き

2011.9.28 高萩 RC ロータリー情報・研修員会

1. <道徳律の制定>

1911 年ロータリーモットー（ He profits most who serves best と Service, not self ）が採択されて職業奉仕理念が確立したにも拘らず、ロータリアン同志の互惠主義が改善されないことに対して、1913 年のドゥルース大会でロータリアン各自が如何にして職業倫理を高めるかの指針を作成し、次年度のヒューストン大会に提案することが決議されました。

職業奉仕理念が確立したことを受けて、この理念を自らの事業所や業界で具体化するための指針は、全国のクラブから数百に上る提案が集まり、1914 年のヒューストン大会では纏める事が出来ず、1915 年のサンフランシスコ大会に「道徳律」の文章案を提出することになり、アイオワ州シューシテイ RC のロバート・ハント、パーキンス、ジョン・ナントが中心になり 500 語に纏め、ほぼ原文のまま採択され、正式な「**職業人のロータリー道徳律（職業倫理訓）**」となりました。

現在では、「歴史的文献」とされ、RI の公式資料には掲載されていませんが、その内容はロータリーの「奉仕理念」の真髄を表現しており、現代社会においても、ロータリアンが守るべき指針となるべきものと考えられます。

「職業人のためのロータリーの道徳律」

1915 年 7 月 19 日～23 日サンフランシスコにおける第 6 回国際ロータリー・クラブ連合年次大会によって採用された。

この職業倫理基準は、我々の共通な人間性に基づく思い遣りを心に留めるものである。職業上の取引や野望や諸関係は、つねに社会の一員として自分が果たす最高の義務を考慮すべきである。職業生活のあらゆる場面において、また、自分が直面するすべての責任において、先ず最初に考えなくてはならないことは、その双方を終えた時に初めて果たされる責任と義務を満たすことである。人間の理念と業績の水準をそれに気づいた時よりも、少しでも高めなければならないし、このことを考えることこそ、ロータリアンとしての私の義務である。

「倫理基準」

- 第1条 自分の職業は価値あるものであり、社会に対する絶好の機会を与えられたものと考えよう。
- 第2条 自己改善を図り、実力を培い、奉仕を広げよう。それによって、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」というロータリーの基本原則を実証すること。
- 第3条 自分は企業経営者であるが故、成功したいという大志を抱いていることを自覚すること。しかし、自分は道徳を重んじる人間であり、最高の正義と道徳に基づかない成功は、まったく望まないことを自覚すること。
- 第4条 自分の商品、自分のサービス、自分のアイデアを金銭と交換することは、全ての関係者がその交換によって利益を受ける場合に限り、合法的かつ道徳的であると考えよう。

- 第5条 自分が従事している職業の倫理基準を高めるために最善を尽くすこと。そして、自分の仕事のやり方が、賢明であり、利益をもたらすものであり、自分の実例に倣うことが幸福をもたらすことを、他の同業者に悟らせること。
- 第6条 自分の同業者よりも同等またはそれに優る完全なサービスをすることを心掛けて、事業を行うこと。やり方に疑いがある場合は、負担や義務の厳密な範囲を超えて、サービスを付け加えること。
- 第7条 専門職種または企業経営者の最も大きい財産の一つこそ、友人であり、友情を通じて得られたものこそ、卓越した倫理にかなった正当なものであることを理解すること。
- 第8条 真の友人はお互い何も要求するものではない。利益のために友人関係の信頼を濫用することは、ロータリーの精神に相容れず、道徳律を冒瀆するものであると考えること。
- 第9条 社会秩序の上で、他の人たちが絶対に否定するような機会を不正に利用することによって、非合法的または非道徳的な個人的成功を確保することを考えてはならない。物質的成功を達成するために、他の人たちが道徳的に疑わしいという理由から採らないような、有利な機会を利用しないこと。
- 第10条 私は人間社会の他のすべての人以上に、同僚であるロータリアンに義務を負うべきではない。ロータリーの神髄は競争ではなくて協力にあるからである。ロータリーのような機関は、決して狭い視野を持つてはならず、人権はロータリークラブのみに限定されるものではなく、人類そのものとして深く広く存在するものであることを、ロータリアンは断言する。さらに、ロータリーは、これらの高い目標に向かって、すべての人やすべての組織を教育するために、存在するのである。
- 第11条 最後に、「全て人にせられんとすることは、他人にもその通りにせよ」という黄金律の普遍性を信じ、我々が、全ての人にこの地球上の天然資源を機会均等に分け与えられたときに、社会が最もよく保たれることを主張するものである。

「奉仕の理念」が確立し、ロータリーの「奉仕のモットー」が二つ確定し、具体的な活動指針となる「道徳律」が完成しました。それから後のロータリー運動は、その道徳律をいかにして自分の事業所や所属する業界に適用するかという運動に変わっていきました。まず、ロータリアン自身が同業者組合に入って、業界の指導的立場になって、その業界に道徳律を広める活動に発展しました。

業界が採用した道徳律の中で有名なのが、ガイ・ガンディカーが作ったレストラン協会の「道徳律」です。若年労働者の深夜労働が当たり前だった時代に、現在の労働基準関係諸法や就業規則と全く引けを取らないような規約を定め、更に職業倫理基準、接客態度、サービス、取引関係、同業者対策、行政との関係、こういったものを、こと細かく決めて、それを守っていったのです。

1920年から1930年にかけての10年間で、ロータリーの職業奉仕が社会に大きな影響を及ぼした最盛期といえます。1920年にアメリカに禁酒法が制定され、期を一にしてマフィアがシカゴで活動を開始します。前述のレストラン協会の道徳律は、禁酒法の絡みで、マフィアのターゲットになったレストラン業界を防衛するためにガイ・ガンディカー作ったものと言われています。

一方、イギリスを中心とするシェルドンへの攻勢は、**He profits most who serves best** というモットーの廃止に加え、シェルドンの退会後は、イギリスの標的は職業奉仕のモットーを具体的に表したドキュメントである道徳律の廃止運動に変化していきます。さらに、内容が厳しすぎる（第6条）や表現が宗教的すぎる（第11条）との批判が続出し、1931年に道徳律の領布禁止になり、1948年にはRIの職業奉仕委員会が廃止となります。さらに、1951年には道徳律はそのものが廃止され、1980年にはRI細則に細々と残っていた道徳律という言葉も抹消されました。

2. <ロータリーのもう一つの奉仕理念を表す言葉は **Service above self** 超我の奉仕 です>

Service above self の原型となる言葉は **Service, not self** であり、このフレーズは、1911年の第2回全米ロータリークラブ連合会のコロンビア川をさかのぼるエキスカッションでミネアポリス RC のフランク・コリンズが即興演説した中に出てくる言葉です。社会奉仕のモットーだと説く人もいますが、最初の演説からみるとちょっと違うようです。

1911年11月の「National Rotarian」にコリンズの演説原稿が掲載されていますが、「今までロータリアンが独占していた会員同士の相互取引を会員外にも拡大しようという意味」で **Service, not self** が使われているようです。彼自身このモットーは黄金律を言い換えたものであると述べており、自分だけが儲けるのではなく、他人にもこの恩恵を与えるように取引を拡大すべきであるという意味を持っており、むしろ職業奉仕に関連したモットーだと言えます。コリンズの原文を熟読すると、この **Service, not self** というフレーズは、一部のロータリアンが主張するような己を犠牲にして他人のために尽くすという宗教的意味を持っている高い次元の言葉ではなく、He profits most who serves best を別の表現で言い換えた言葉であることが分かります。いかなる手段を弄しても利益を独占しようという当時の情勢から考えても、宗教や倫理から人の心をひきつけることは不可能な時代背景を勘案しなければなりません。

(シェルドンの文献には、**Service, not self** も **Service above self** も一切使われていませんから、この **Service above self** というフレーズがシェルドンの作というのは間違いです。**Service above self** を誰が作ったかは、現時点ではわかりません)

1916~18年は最初の二つのモットー（**He profits most who serves best** と **Service, not self**）が使われています。1920年には **Service, not self** に代わって **Service above self** が使われています。1921年の国際大会で、**Service, not self**、**Service above self**、**Service before self** を廃止して、**He profits most who serves best** のみにする決議案が提案され否決されましたから、1921年のころはこれらの4つのモットーが職業奉仕を示すモットーであったことが推察されます。これ以降、**He profits most who serves best** と **Service above self** の双方が使われています。

3. <ロータリーの奉仕理念 **The ideal of service** を明文化したものが決議 23 - 34 号>

(**The ideal of service** という言葉を最初に使ったのは1912年大会の演説でシアトルRCのスキールであり、それに続いて1912~13年度RI会長のグレン・C・ミードが1915年サンフランシスコ大会のスピーチの中で「私たちは事業や経済活動の中で同僚に対して高い **ideal of service** を与えることはできないだろうか」と述べています。事業や経済活動の中という但し書きがついていますので、奉仕理念の最初の発想は職業奉仕理念であったことが推察されます。)

1915年~23年頃はロータリーの**第2の危機**といわれ、奉仕理念提唱派と奉仕実践派の激しい対立が起こり、この対立を解消するに効果があったのが「決議 23 - 34 号」の採択であり、**The ideal of service** すなわち「ロータリーの奉仕理念は、利己的な欲求と利他の心の葛藤を和らげる人生哲学であると定義した上で、超我の奉仕 **Service above self** という考え方は、最も多く奉仕するもの最も多く報いられる **He profits most who serves best** という実践的な倫理原則に基づくものである」と述べています。

——— 決議 23 - 34 号については、10月に「ロータリー情報 10 分間」で取り上げます。———

4. <四つのテスト>

1929年におこった世界大恐慌は、ロータリーの職業奉仕理念が大不況にも耐えうることを実証する

機会となりました。最新の企業経営方針を先取りしていたロータリアンには、そんなに大きな経済的ダメージを与えることはなく、修正資本主義に基づく職業奉仕の理念の構築、道徳律の制定及び事業における道徳律の適用、四つのテストといった職業奉仕の実践活動も功を奏して、ロータリアン自身が不況に耐えうる実力を付けており、ロータリアン企業は迅速に業績を回復していきました。

「四つのテスト (The Four-Way Test)」は、シカゴ RC のハーバート・テラー (後に 1954~55 年度 RI 会長) が、1932 年に倒産の危機に瀕していたクラブ・アルミニウム社の経営を任せ、会社再建のために考案した社員の行動基準でした。テラーは、この 24 語からなる行動基準を、従業員、顧客、取引先すべてに厳格に適用し、その結果会社の信用が増し、業績も回復しました。

RI 理事会は、この「四つのテスト」を 1943 年正式に採択しました。1954 年 RI 会長に就任したとき、テラーは「四つのテスト」の著作権を RI に寄付しました。以後、ロータリーでは、「ロータリアンの行動規範、職業奉仕実践の基準」として、「四つのテスト」を奨励しています。

「四つのテスト」の公式日本語訳は、ロータリー創立 50 周年記念事業の一環として、日本中のロータリアンから公募し、東京 RC の本田親男氏の訳文が採用されました。簡潔で分かりやすいのですが、少し抽象的で原文の精神が表現されていないとの声もあります。

以下に、原文、本田親男氏の公式日本語訳、職業奉仕の基準として改訳した一例文を記載します。

「The Four-Way Test」

Of the things we think, say or do

- 1) **Is it the TRUTH?**
- 2) **Is it FAIR to all concerned?**
- 3) **Will it build GOODWILL and BETTER FRIENDSHIPS?**
- 4) **Will it be BENEFICIAL to all concerned?**

「四つのテスト」

言行はこれに照らしてから

- 1) 真実かどうか
- 2) みんなに公平か
- 3) 好意と友情を深めるか
- 4) みんなのためになるかどうか

「四つのテスト」

事業の立案・企画・実行はこれに照らしてから

- 1) 嘘・偽りはないか
- 2) 関係者すべてに公明正大か
- 3) 信用を高め、より良い関係を築けるか
- 4) 関係者すべてに有益か

5. <The ideal of service の持つ意味合いが変わってきたのは 1930 年代からです>

1931 年に RI が発行した「目標設定プラン」というパンフレットの中で、「The Ideal of Service」とは、①超我の奉仕②最もよく奉仕する者、最も多く報いられる③他者への思いやり④人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしなさい (黄金律) という四つの言葉で示しています。

1937 年ニース国際大会で、RI 会長ウィル・メーニア Jr は「誰かが奉仕理念とは、他人のことを思い遣り他人のために尽くすことだと定義しました。他人のことを思い遣り他人のために尽くすことを通じて、ロータリアンは自らの職業の規範を高めながら、国際理解と親善と平和を推進するために自らの地域社会に役立つように努力しています」と述べています。この説明は明らかに人道奉仕活動を指すものと考えられている。

チェスリー・ペリーは 1954 年 3 月にタルサ・クラブで講演して「多くのロータリー・クラブがそれぞれの地域社会で行っている社会奉仕活動の素晴らしい業績に加えて、ロータリー運動は全体として、ロータリーの会員になる人だけではなく、人類全体にわたって、他人のことを思い遣り他人のために尽くすという ideal of service が受け入れられ、実行されていくものと信じています」と述べています。さらに、1955 年のインターシティ・ミーティングで「ロータリアンは人類すべてが他人のことを思い遣り他人のために尽くすようになるまで、超我の奉仕の活動に参加するように説得すべきです」と述べています。

このようにして、ロータリーの奉仕理念は**職業奉仕から徐々に社会奉仕に代わっていった**のです。

Official directory には「奉仕の理想とは他人のことを思い遣り、他人のために役立とうとすることである」と定義されています。このことから、現在の Service above self は他人のことを思い遣り、他人のために奉仕するという、いわゆる社会奉仕や世界社会奉仕の活動を推奨するモットーだと考えることができます。

6. <ロータリーの危機——1970 年代後半から>

- ① 経済システムの変化 新資本主義（注）の台頭——虚業的（注）投資会社⇒職業倫理の低下
- ② 奉仕哲学の変化と間違った解釈——職業奉仕よりボランティア活動重視
- ③ 国際ロータリーの変化——中央集権と活動方針の変化——→財団寄付が重要視
- ④ クラブの管理運営の変化——親睦の欠如・クラブ例会の形骸化——→ロータリアンとしての魅力やメリットの低下

（注）新資本主義

自らは資本を持たない疑似資本家の出現（投資ファンド等）

資本家 対 疑似資本家 対 経営者 対 労働者 の四極対立

投資ファンドの暗躍——レバレッジなどの技法を使って、オイル、穀物、不動産などあらゆる分野に先物投資

（世界中のほとんどの投資銀行や証券会社がこれに加わる）

M&A による企業乗っ取り

（注）虚業と実業の違い

虚業 利益の追求、疑似投資家による金もうけの手段

実業 職業を通じて社会に貢献奉仕

会社・従業員・顧客の利益のための M&A 実業

会社乗っ取りのための M&A 虚業

このような社会の変化の中で、ロータリーでシェルドンが唱えた職業奉仕理念の考え方はすたれるとともに、異質なものへと変化せざるを得なくなりました。

7. <職業に対する考え方の変化>

かつて私たちは、陰日向なく額に汗しながら、黙々と働く姿を尊いものだと教えられてきました。会社は永年雇用、年功序列を原則としながら社員の福利厚生や教育にも気を配り、社員はそれに応えるために会社に忠誠を誓うことを当然だと考えてきました。すなわち、シェルドンがロータリーに提

唱した修正資本主義に基づいた職業奉仕の理念を反映した社会でした。しかし、昨今はその考え方が大きく変わってしまいました。労使の目的意識が変化し、雇用体系も変わり、効率よく働くことが美德とされ、生活費を稼ぐのに必要な時間だけ働いて、余暇を楽しむように変わりました。

職業に関する目的も大きく変わりました。

従来の職業観——額に汗して働く・勤勉——永年雇用・年功序列・会社への忠誠心

↓

労使の目的意識の変化・雇用体系の変化・職業に関する目的の変化

市場の原理に任せ、倫理観による規制を排除すれば、拝金思想に満ちた新資本主義に陥る

8. <職業奉仕理念の変化——RIの方向付——に対する 第2680地区PG 田中 毅氏の疑問>

ロータリーの職業奉仕に対する考え方も大きく変わりました。

1987年にRI職業奉仕委員会は、「職業奉仕に関する声明」を發表しますが、実はこの中に書かれている「クラブが職業奉仕を実践する」という文章について疑義があります。何故ならば、シェルドンの職業奉仕論の中からは、クラブが職業奉仕の実践を行うという発想は出てこないからです。職業を持っている個人だから職業奉仕の実践ができるのであって、職業を持たないロータリー・クラブがどうやって職業奉仕を実践するのかということです。

RIはその具体例としても職場訪問、優良従業員の表彰、ボランティア活動をあげていますが、これが職業奉仕活動かどうか疑問の残るところです。

もう一つの間違ひは、ボランティア活動を職業奉仕の範疇にいれることです。医者という立場でフィリピンに行って白内障の手術をするのは職業奉仕ではありません。何故ならば、その医者はこの活動の受益者ではないからです。国内でボランティア活動すれば社会奉仕、外国ですれば国際奉仕です。ボランティア活動する場所がどこであるかによって、社会奉仕か国際奉仕に分かれてくるとしても、これは職業奉仕ではありません。

9. 参考：<職業奉仕について多くの日本のロータリアンが語っているが、次の三派に纏められる>

① シェルドン派——ロータリー運動において、シェルドンの思想を重視する人達

代表的論客は第2680地区PGの田中毅氏で「職業奉仕は経営方法であり、実利的なものである」と解釈

② 天職派——ロータリー運動の原点を、禁欲的プロテスタントの精神構造とし、日本の伝統的職業観と一致とする

代表的論客は第3580地区PGの故佐藤千壽氏でシェルドンの「He profits most who serves best」も、ロータリー以前から、禁欲的プロテスタンティズムの精神構造として潜在していたと考える

③ 倫理派——職業奉仕を職業倫理ととらえる

代表的論客は第2680地区PGの深川純一氏で「ロータリーは職業人倫理運動である」と主張している。一般的に倫理派の人が、シェルドン派や天職派を批判するときの決まり文句がある。神学論争という表現で、「シェルドンは博物館に入れろ」や「不毛な神学論争はやめよう」という。